古代史散策

No. 8 6

百舌鳥古墳群めぐり

松下電工松寿会
同好会　古代史散策部

平成14年11月作成

《コース》　8.5km

JR阪和線堺市駅 ― 方違神社 ― 反正天皇陵 ― 仁徳天皇陵 ― 履中天皇陵 ― いたすけ古墳 ― 御廟山古墳 ― にさんざい古墳 ― 中百舌鳥駅 …解散

《総説》

“和泉”の国名は、律令制国家が軌道に乗り始めた8世紀の頃、泉井上神社（平成12年3月訪問）境内から湧き出た清水に因んで起こったと云われている。

堺は、摂津・河内・和泉の国境線が集まるところから“三国ヶ丘”の地名ができ、三国の境に発達した集落に、いつしか“さかい”の地名が生まれたと云う。記録的には、平安時代に熊野神社の分社を奉祀し、堺（境）王子と呼ばれたのが最初の“堺”の地名である。

しかしこの付近は、池上曽根・四ツ池など弥生時代遺跡の存在で、早くから農耕生活が営まれていたことが知られており、弥生時代に成長した共同体が順次統合されやがて古代国家が成立するが、大和と河内を中心とする統一政権の勢力は強く、古墳時代を代表する地となっていた。すでに大和朝廷が仁徳天皇陵を中心とする百舌鳥古墳群を築造し、周辺豪族を支配下に入れていた。また朝鮮半島から土器生産技術を持った人々が移住して、和泉丘陵一帯は陶邑（すえむら）とよばれる須恵器生産の中心となったことも、この地帯が早くから開発されたことを物語り、大王たちの積極的な大陸文化の摂取がうかがわれる。

飛鳥時代に入って堺は、難波津と並んで大陸系文化の導入港として、飛鳥京へ達する 官道丹比（たじひ）道（竹内街道）の起点として重要な存在であった。

《百舌鳥古墳群》

堺市の北部中央、三国ヶ丘台地と称される中位段丘上に、東西４㎞、南北４.５㎞に亘って分布する古墳群の総称で、日本最大（世界最大）の大仙古墳（仁徳天皇陵）をはじめ、ミサンザイ古墳（履中天皇陵），田出井山古墳（反正天皇陵），にさんざい古墳などと、それに関連する陪塚（ばいちょう）および丸保山古墳など独立する中小の古墳からなる。

これまで前方後円墳31基，方墳７基を含む合計104基が確認されているが、現在では前方後円墳21基，方墳５基，円墳23基の合計49基を残すのみで、大半が農地拡張土砂採取・宅地開発などにより破壊された。

当古墳群の大半は、５～６世紀に築造された同一系譜に連なる大古墳と陪塚であるが、文殊塚・城の山古墳など、石津川流域の段丘上に築造された６世紀後半頃の横穴式石室を主体とする古墳は、周濠を伴わないことなどから異系譜のものと考えられている。

なお、古墳群の位置する地域に、土師（はぜ）遺跡・百舌鳥陵南遺跡などの古墳時代の集落遺跡が確認されており、両者の関連が考えられる。

《　各　説　》

【方違（かたたがい）神社】　　堺市北三国ヶ丘２丁

通称“ほうちがい”と呼ばれ、八十天万魂神・三筒男大神・素盞嗚尊・息長足姫（おきながたらしひめ）命（神功皇后）を祭神とする。

社伝によれば、崇神天皇８年、素盞嗚尊を祀ったのを創始とし、神功皇后が三韓出兵の帰途この社に参拝して天神地祇（てんしんちぎ）を祀り、皇軍の方忌除災（ほうきじょさい）を祈ったので、後に方

除けの神として、方祟りの災厄が除かれると云うことで、家を新築する者や旅に出る者など全国からの参詣者が多く、社地の土を受けて祟りや災難を祓った。

【[18]反正天皇百舌鳥耳原北陵】　堺市北三国ヶ丘町

田出井山古墳と名付けられている、墳丘全長147ｍ、前方部幅110ｍ、後円部直径76ｍ、高さ14～16ｍの前方後円墳である。

元禄８年(1695)に後円部が崩れ、石廓・石棺が露出したが、内部には何もなかった。

また、宝暦７年(1757)刊の“全堺詳志”に「御廟は北峰にあり、発掘した跡見えて、南北五間半，東西四間半，深さ一間余の窪あり、唐櫃は不見」とあり、当時既に盗掘されていたことが判る。

昭和55年に古墳東側部分の調査が行われた結果、二重濠の一部が発見され、現在の墳丘外周18ｍの所に幅20ｍの濠があることが判った。

【[16]仁徳天皇百舌鳥耳原中陵】　　堺市大仙町

洪積台地上に南南西面して、三重に築かれた前方後円墳で、墳丘の全長486ｍ、前方部幅306ｍ，高さ33ｍ、後円部直径249ｍ，高さ35ｍ、三重の周濠を含めると周囲2,718ｍ、面積は約46万４千㎡あって、盛り上げた土の量は140万㎥と計算されている世界最大の古墳で、俗に“大仙古墳”と呼ばれている。葺石・円筒埴輪の使用が顕著で、家型・馬・鳥・人物などの埴輪も発見されている。

このような巨大な墳丘は５世紀の古墳に多く、大和朝廷の南朝鮮への進出によって多数の労働力や技術がもた

らされた結果と考えられる。

しかし、墳丘の現状はかなりの崩壊を示しており、明治５年の風害によって前方部に長持型石棺を収めた竪穴式石室が発見され、内部には眉庇付冑・短甲・ガラス器などがおかれていることが判った。

陵の周囲には、茶山・大安寺山・源右衛門・塚廻・収塚・竜佐山・狐山・銅亀山古墳など、濠の内外に亘って円墳や前方後円墳など十数基の陪塚がある。

【[17]履中天皇百舌鳥耳原南陵】　　堺市石津ヶ丘

ミサンザイ古墳と呼ばれる前方後円墳で、三段築成の西側くびれ部に小さい造り出しのある、墳丘全長365m、前方部幅237m，高さ25m、後円部直径205m，高さ23m、総面積17万㎡の、わが国では仁徳・応神陵に次いで３番目に大きい古墳である。

10基前後の陪塚があったと考えられ、大仙公園横の七観音古墳はその一つだと云われている。

昭和初期まで、古墳西側に二重に巡らせた濠の外濠の一部が残っていたが、現在は埋められている。

【いたすけ古墳】　　堺市百舌鳥本町

三段築造の前方後円墳で、墳丘全長146m、前方部の幅98m、後円部の直径90.4m，高さ10.5m、南側くびれ部に造り出しを備えている。昭和30年、後円部から見事な埴輪の冑が発見され、堺市に保管され文化財保護のシンボルマークになっている。

昭和30年頃、宅地造成のために破壊されかけたが、民間の保存運動の結果破壊は免れ、さらに国の史跡に指定された。今でも開発のときに架けられた橋が残っている。

周囲には公園が造られ市民の憩いの場となっており、生きた記念物として環境整備に努めている。

【御廟山古墳】　　堺市百舌鳥本町

５世紀の中頃から後半に築造と考えられる前方後円墳で、墳丘の全長188m、前方部幅119m、後円部直径95m、現在では一重の周濠であるが、最近の調査で二重の濠があったことが確認されており、陵墓参考地として宮内庁が管理している。

土地の人は“ゴベ”と呼んでいるが、御廟山が詰まったものと思われる。

一説によれば、この古墳は[15]応神天皇の殯宮とも、神功皇后のそれとも、また武内宿祢のそれとも云われているが明らかでない。応神天皇陵は古市古墳群の中にあるが、「古事記」に“河内恵我之裳伏岡陵”の下に“百舌鳥陵也”の５文字がありこのように云われたものと思われる。

【にさんざい古墳】　　堺市百舌鳥西之町

百舌鳥古墳群の中では比較的後半に築造された前方後円墳で“土師古墳”とも称されている。墳丘全長290m、前方部幅226m、後円部直径156 m、高さ40mで、当古墳群の中では仁徳・履中陵に次いで３番目に大きいものである。昭和53年の前方部周濠外側部分の発掘調査で、二重目の濠跡と葺石・埴輪が検出された。

現在は陵墓参考地になっているが、古い記録にはここが反正天皇陵とする民間伝承があったことが記録されている。

作成　末岐敏一　案内・解説　田井敏夫・番匠谷文三

【にさんざい古墳】　　堺市北区百舌鳥西之町

百舌鳥古墳群の中では、比較的後半に築造された前方後円墳で、**土師古墳**とも称されている。墳丘全長 290m，前方部幅 226m，後円部直径 156m・高さ 40mで、当古墳群の中では仁徳・履中陵に次いで３番目に大きいものである。

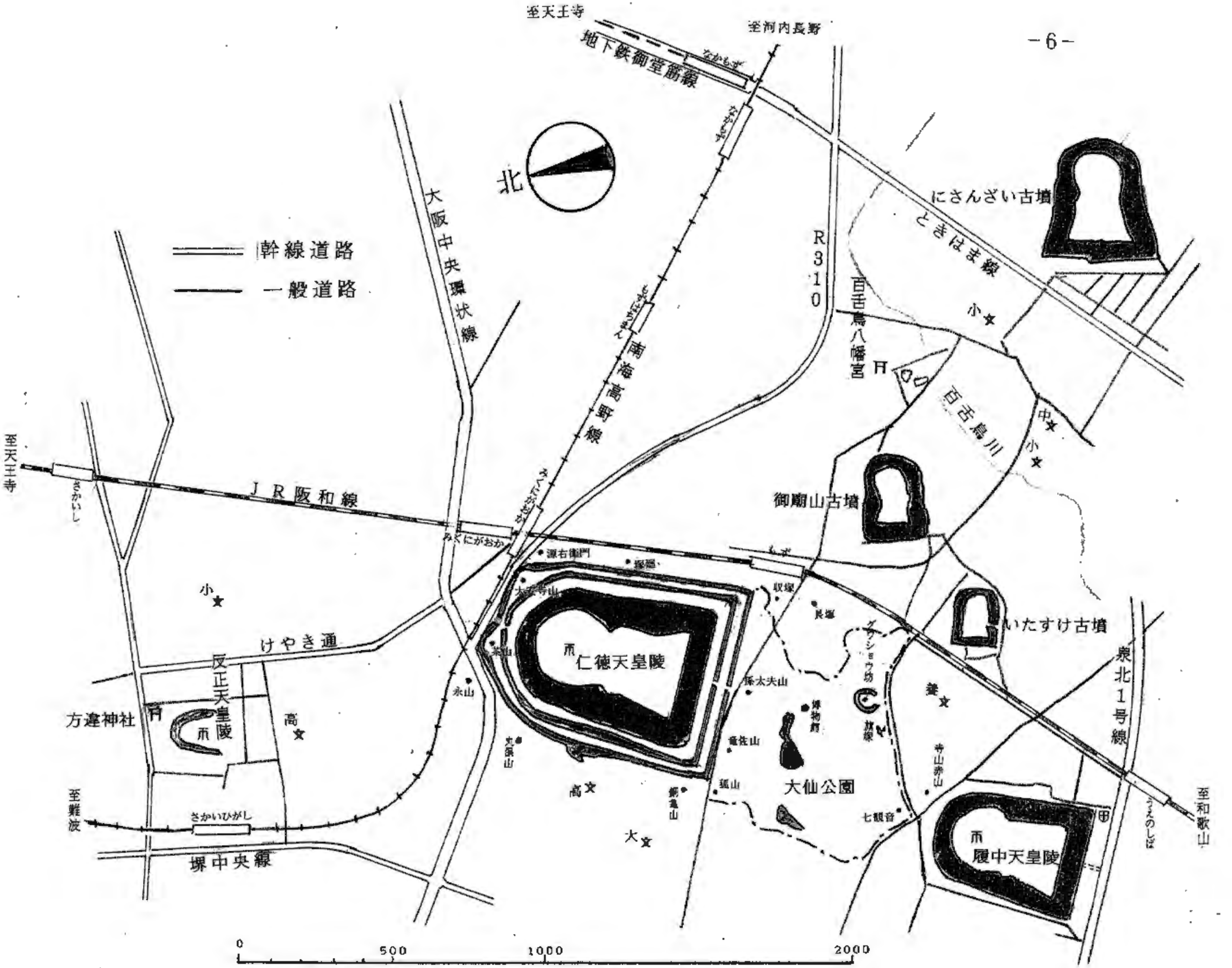
昭和 53 年の前方部周濠外側部分の発掘調査で、二重目の濠跡と葺石・埴輪が検出された。

現在は、陵墓参考地となっているが、古い記録にはここが反正天皇陵とする民間伝承があったことが記録されている。

【百舌鳥八幡宮】　　堺市北区百舌鳥赤畑町

社記によれば、欽明天皇の頃、八幡神の託宣を受けて創建されたとあるが“延喜式”に記載がなく、資料的には保元３年(1158)の官宣旨に石清水八幡宮領『万代別宮』とあるものが、この百舌鳥八幡宮を指すと考えられている。

祭神は、応神天皇，神功皇后，仲哀天皇，住吉三神，春日大神であり、百舌鳥９町の氏神として親しまれている。


至天王寺
至河内長野
地下鉄御堂筋線
なかもず
北
幹線道路
一般道路
大阪中央環状線
南海高野線
もずはちまん
みくにがおか
R310
にさんざい古墳
ときはま線
百舌鳥八幡宮
百舌鳥川
御廟山古墳
いたすけ古墳
泉北1号線
至天王寺
さかいし
JR阪和線
もず
源右衛門
収塚
長塚
グワショウ坊
仁徳天皇陵
けやき通
反正天皇陵
方違神社
永山
塚廻
孫太夫山
竜佐山
旗塚
博物館
丸保山
狐山
銅亀山
大仙公園
寺山南山
七観音
履中天皇陵
至難波
さかいひがし
堺中央線
うえのしば
至和歌山
0
500
1000
2000